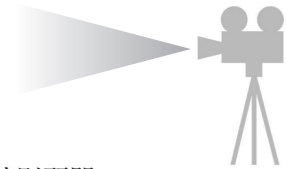




映画漫歩

(第21回)

映画とその時代 ⑪



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

いまや日本映画界を背負う存在ともいえる山田洋次監督の最新作『東京家族』は、その完成までに大きな曲折があった。万端の準備を終えたクランクイン直前、東日本大震災に遭遇。全く構想を新たに書き直し、スタッフも変え、結局3年近い歳月を費やした力作だ。

この作品の骨格は、敬慕してやまない大先達小津安二郎監督への一途なオマージュであり、その代表作『東京物語』のこれ以上はない真摯なリメイクだ。この不朽の名作は、いまだに語り継がれる名シーンを数多く遺しているが、そのひとつひとつの抜き差しならない構図、練り抜かれたセリフ、そのやり取りの微妙な間合いなど、いわゆる小津調と呼ばれる手法の風韻を、何とか色褪せぬまま平成の現代に伝えようとする意欲が、画面から惻々として伝わってくる。古来、名作やヒット作のリメイク物は数知れないが、おそらくこれほどオリジナルへの畏敬に溢れた作品はないだろう。

そして、八十歳を超えた山田監督は、久しく閉塞感に覆われ、さらにすべての価値感を揺るがす3.11の大惨事に遭遇した現在、この名作の風韻やそのメッセージをモチーフにして、この国の若い世代に、これからの(家族)の有り様を問いかけたかったのではないか。

オリジナルには存在しない重要なキャラクター

が登場する。オリジナルでは遺影の写真だけだった次男だが、古風な父とは反りが合わず、兄や姉と同様に東京という巨大都市に埋没している。東京への旅を思い立った両親にとってその暮らしぶりがもっとも心配の種だったが、久びさに会ったこの次男は、世相の風潮に一切流されず、自らの美意識を屈託なく追いつづけ、その世界のなかに、貧しいながら地に足のついた生活を築いていた。そして両親が初めて知ったその恋人は、オリジナルでは原節子の役回りだが、やはり爽やかに自立した生活を持ち、たしかな連帯感で結ばれていた。

このふたりの出逢いが、震災直後の東北の被災地で、無心に汗を流す若者たちのボランティア同士であったところに、この監督の思い入れとそのメッセージがこめられているのではないか。

『東京物語』は、家族の絆のゆるやかな崩壊を(還らざる河)と達観し、天上から俯瞰するような眼差しで描いたが、山田監督は何とか一筋の灯を見出そうとしているようだ。

それにしてもあの大惨事は、ゆくりなくこの映画のメッセージをより痛切なものにしたが、完成が遅れる間に、『東京物語』が世界映画史上の一位に選出され、山田監督は文化勲章に輝いた。このめぐり合わせは何を意味しているのだろうか。—————